

アンケート調査の結果から分析するトルコ人学習者の 日本語の格助詞「の」の誤用の原因

ダルクラン・アイシェ・ヌル
DALKIRAN, Ayşe Nur

はじめに

本研究では、日本語教育分野でよく使用される初級教材『みんなの日本語』における日本語の「の」格の用法を元に作成したアンケート調査によって、トルコ人日本語学習者がそれらの用法を使用する際に犯す誤用を分析し、その原因を探る。本研究の目的は、Dalkıran (2013) で作成した日土対訳用例データベースから明らかになった両言語の属格形式の類似する用法と相違する用法の一部であると考えられる初級教材における用法を元に作成したアンケート調査によって、トルコ人日本語学習者がそれらの用法を使用する際に犯す誤用を分析し、学習者の「の」格に関する誤答の原因を追究し、その性質を記述することである。その際、両言語間の属格形式の相違点が、学習者の誤答にどの程度影響しているかを探り出し、学習者の誤用の原因において言語間の差異が主要な要因であることを主張する。

1. 誤用分析の先行研究

1. 1. 誤用研究と誤用分析について

小池生夫編集主幹 (2003, p. 150) 『応用言語学事典』によると、「誤り (エラー)」とは、言語習得の過程で学習者の不適切な仮説によって生じた欠陥部分である。要するに、「誤り」はある言語を学ぶ学習者がその言語を学ぶときに犯す語彙や文法の誤りを指す言葉である。誤りに関して行われる研究には大きく分けて2つの種類があると言える。まず、その一つは、「誤用研究」であり、学習者の誤用を分析し、その原因を究明することによって学習者の言語能力、学習方略など第二言語習得過程の解明を研究の主たる目的におく研究である。もう一つは、「誤用分析」であり、二つの言語を比較・対照することによって学習の困難点を予測し、その方面に集中的な訓練を行うことによって、学習効果を高めることを狙いとする対照研究において行われる対象分析によって明らかにすることができない学習者の誤用の原因を明らかにすることを目的とする研究である。これらの研究は両方とも学習者の誤用を研究の対象にし、その原因を追究する研究である。張 (2001, p. 23) でも、「誤用研究」は、広義には外国語を学習する者がその外国語を使用するときに犯す誤りの原因を分析し、日本語学・日本語教育などに役立たせようとする研究であり、狭義には、第二言語習得研究の三つの段階の二つ目の段階を指す用語であるとされている。それらの段階は、1) 対照分析 (contrastive analysis)、2) 誤用分析 (error analysis)、3) 中間言語分析

(interlanguage analysis) であるとされている。

日本語教育学会編 (2005, p. 698) 『日本語教育事典』によると、誤用研究の目的は大きく二つに分けられる。一つ目は、第二言語習得理論や日本語文法理論として専門化される、理論的アプローチである。二つ目は、日本語教育への貢献、つまり、誤用を分析評価し、教材・テスト作成、教授法への応用 (資料の直接的利用) を考えることである。

誤用分析は研究者によっては、「誤答分析」、「誤りの分析」と呼ばれることもある。本研究では、トルコ人日本語学習者を対象に行ったアンケート調査での誤答を分析の対象とするため、「誤答分析」を使うことにする。

1. 2. 誤用分析の先行研究

1960年代まで、言語学習者の誤りは、必ず訂正しなければならないものとして考えられていた。しかし、1960年代の後半から現在にかけて、その考え方は変化し、外国語を学習する過程で誤用を犯すのはそのことばを習得するための一つのステップであると考えられるようになった。こういった立場が登場したのは、Corderの論文 (1967) 「The Significance of Learners' Errors」からである。それまで罪のように扱われた学習者の誤りが再評価され、それ以後学習に不可欠なものと思われるようになった。誤りが学習者に関して重要な情報を提供することが分かり、誤用研究が盛んに行われ、その成果が教材作りや教授法に利用されるようになった。このように重要な性質を持つ言語学習者の誤用は、言語学者が言語学や言語教育の研究を行う上で重要なヒントを得られる貴重な資料であると考えられている。

1. 3. 日本語の格助詞の誤用分析研究と本研究の立場

日本語教育学会編 (1978) の『日本語教育』34号と言語編集部編 (1981) の『言語』12号 (大修館書店) が、その時代の誤用分析研究の状況やその理論と課題に関する論文の特集号であり、日本語の誤用分析の歴史において、誤用分析研究が盛んに行われ始めたきっかけになったと言えるほどの大事な役割を持っている。

それ以後出された日本語の格助詞の誤用分析研究に関連する文献を見てみると、その中に、出身国が異なる学習者を同時に研究対象とする誤用分析研究もあれば、特定の言語を母語とする日本語学習者を対象とする誤用分析研究もある。前者には、細川 (1993)、松田 (2006)、原沢 (2012) などが挙げられ、後者には、小林 (1981、1983)、佐藤 (1984)、田窪 (1987)、栗山 (2004)、稲葉 (2004)、松田 (2005、2006、2007) などが挙げられる。前者の論文に共通した特徴は、母語の異なる学習者の誤りを同時に分析し、日本語習得における共通した困難性を明らかにしている点である。後者の論文に共通した特徴は、学習者の母語と日本語との相違を示しながらその相違がどのような誤用と結び付くかを究明している点である。前者の研究は、理論的には第二言語習得理論

に基づいており、その枠組みにおいて日本語学習者の共通した誤用を指摘したものである。後者の研究は、理論的には対照分析に基づいており、その枠組みにおいて母語の干渉による誤用を指摘したものである。佐藤（1984）は、誤用の原因が全て干渉であると考え、誤用をその考え方のもとで分類している。また、田窪（1987）は日本語と韓国語の対照分析に基づいて誤用の分類をし、対照分析で予測できないような誤用も指摘している。

本研究の立場は、上記の後者の研究のように、理論的には対照分析に基づき、日本語とトルコ語の属格形式の同じ用法でも形式が相違するところの大部分は、日本語を学ぶトルコ人日本語学習者の言語習得に母語干渉としてマイナスの影響を与えているということアンケート調査の結果を用いて行う誤答分析を基に論証するところにある。また、田窪（1987）のように対照分析で予測できないような誤用の他の原因も明らかにすることを目標としている。

日本語の格助詞に関するこれらの誤用分析の先行研究は主に、連用格の「を」「に」「で」などを取り扱っており、連体格の「の」に関して体系的な研究は管見の限りではあまり行われていない。その中で松田（2006b）が「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース」（国立国語研究所作成）に集められた7カ国（中国、韓国、モンゴル、マレーシア、タイ、ベトナム、カンボジア）の日本語学習者による日本語作文を使用し、松田（2005）ではモンゴル人、松田（2006a）ではベトナム人日本語学習者のこれらの作文データにおける名詞修飾表現の誤用を分析し、①各国語に特有の誤用と母語の影響の有無、②日本語の他の外国語の複合語及び名詞句形成のルールを明らかにしている点で注目に値する。しかし、僅かに見られる名詞修飾表現に関する誤用分析研究の中でもトルコ人日本語学習者を対象にした誤用研究がこれまで行われていない。

さらに、これまで行われてきたトルコ語と日本語の母語話者を対象にした誤用分析研究は極めて少なく、トルコ語と日本語の関係を主に扱う対照研究に関する26件の先行研究のうち誤用分析を用いた研究は安田（2005）とBaykara（2002）の2件しか見当たらない。その中でも日本語の格助詞又はトルコ語の格語尾に関する誤用例を取り扱った先行研究はこれまでのところ見られない。そこで先述したように、本研究では日本語とトルコ語の属格形式の対照研究及び誤用研究を行い、トルコ人日本語学習者の日本語の格助詞「の」の誤用の原因を探る。

2. アンケート調査及び誤用分析の方法

2. 1. 調査目的

「はじめに」でも述べたように本研究の目的は、Dalkıran（2013）で作成した日土対訳用例データベースから明らかになった両言語の属格形式の相違点が学習者の誤答にどの程度影響しているかを探り出し、トルコ共和国・チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学にて日本語教育学を専攻しているトルコ人学習者の「の」格の誤用を分析し、その原因を探ることである。

トルコ人日本語学習者の誤用を分析する際、以下の点を明らかにする予定である。

- ① 使用教材に記載されている「の」格の各用法から設問を2問ずつ作成し、正答数及び誤答数から、誤答の多い用法と少ない用法はどの用法か。
- ② 両言語間の相違点と「の」格の誤答パターンには関連性は見られるか。
- ③ 「の」格以外の助詞の用法の中で、「の」格の用法と混同しやすいと予測される用法の誤答は多いか、少ないか。
- ④ 両言語間の相違点以外に考えられる誤用の要因は何か。
- ⑤ 学習者の誤用は、学習の進度によりどのように変動するのか。

2. 2. 調査対象者及び調査期間

トルコ人日本語学習者を対象に行った本調査のアンケート調査では、助詞の中でも特に習得と使用が難しいとされている格助詞「の」に注目し、トルコ人日本語学習者に「の」の使用に関してどのような誤用のパターンが見られるのかを調査した。

調査対象者は、日本国内の大学に留学し、上級レベルの日本語知識を有しているトルコ人日本語学習者、及びトルコ共和国チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学 (Çanakkale Onsekiz Mart Üniversitesi) で日本語教育学を専攻し、学部課程に在学中の日本語学習者と学部課程を卒業し、現在は就職しているトルコ人日本語学習者である。

調査対象者の人数は、日本国内の大学に留学する学習者10名、トルコ共和国チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学で日本語教育学を専攻し、学部課程に在学中の日本語学習者38名 (2年生12名、3年生6名、4年生20名)、トルコ共和国チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学で日本語教育学を専攻し、学部課程を卒業後、就職しているトルコ人日本語学習者15名の合計63名であった。

本調査は、2013年6月に実施した。

2. 3. 質問紙アンケート調査項目の構成及びその作成

Dalkıran (2013) では、日本語の属格を表す格助詞「の」及びトルコ語の属格を表す格語尾の (- (n) in) の用例をそれぞれ1000例採集し、日土対訳用例データベースを作成した。このデータベースを使用し、まず、日本語の格助詞「の」の用法にトルコ語で対応する形式とその用法、及びトルコ語の属格語尾の (- (n) in) の用法に日本語で対応する形式とその用法を明らかにし、日本語とトルコ語の属格形式の対応関係を探った。次に、日土対訳用例データベースにおける用例の比較・対照により明らかになった日本語とトルコ語の属格形式の類似する用法と相違する用法を考慮し、アンケートを作成した。当アンケートの作成に当たっては、特に以下の点を検討した。

1. 初級教材における「の」格の用法にはどのようなものが見られるか。
2. 初級教材における「の」格の用法の中で、形式がトルコ語と類似し、属格語尾 (/ - (n) ın / ,

/- (n) in/ , /- (n) un/ , /- (n) ün) で表される用法と、形式がトルコ語と相違し「 ϕ 」格か別の格語尾または曲用語尾で表される用法はどれか。

3. 初級教材における「の」格以外の助詞の用法で、トルコ語では属格語尾 (/-(n) in/ , /-(n) un/ , /-(n) ün) で表される用法はどれか。

本調査の方法は、選択肢方式のアンケートである。第一部はトルコ人日本語学習者の性別、学年、日本語能力試験受験の有無、日本語能力試験合格の有無、日本語能力試験の合格レベル、一週間に受ける日本語の授業の時間数、学習者の日本語のレベル、日本語の授業で使用している教科書名等に関する質問で、第二部は60問の選択肢問題からなっている。アンケートを作成する際、『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』（スリーエーネットワーク、2000）という教材を使用した。設問には、「の」格の全ての用法だけでなく、その他の助詞の格助詞「の」の用法と混同されやすいと考えられる用法から抽出したのも含ませ、学習者が「の」だけが問われることに気付かないように配慮した。

「みんなの日本語Ⅰ」及び「みんなの日本語Ⅱ」における「の」格の16の用法のうち、11の用法は相違しており、3つの用法は類似している。それらの用法は次のとおりである。

相違する用法

日本語の原文	トルコ語の逐語訳
1. あの人はIMC <u>の</u> ミラーさんです。	0 kişi, IMC' <u>den</u> Mira Bey' dir.
2. これはコンピュータ <u>の</u> 本です。	Bu, bilgisayar <u>φ</u> kitabıdır.
3. これは日本 <u>の</u> 自動車です。	Bu, Japon <u>φ</u> arabasıdır.
4. きのう <u>の</u> 晩勉強しましたか。	Dün <u>φ</u> akşam ders çalıştın mı?
5. 日本語 <u>の</u> 勉強はどうですか。	Japonca <u>φ</u> çalışması nasıl?
6. インドネシア <u>の</u> バンドンから来ました。	İndonezya <u>φ</u> Bandon' dan geldim.
* (ただし、「インドネシア <u>の</u> バンドン <u>市</u> から来ました」ならトルコ語の対訳と類似する ⇒ İndonezya' <u>nın</u> Bandon <u>Şehri</u> ' nden geldim.)	
7. 旅行は1週間 <u>の</u> 予定です。	Gezi 1 haftal <u>ık</u> planlanmıştır.
8. 健康 <u>の</u> ために野菜をたくさん食べます。	Sağlık <u>φ</u> için sebzeyi çok yerim.
9. 故障 <u>の</u> 場合は、この番号に電話してください。	Arızalanma <u>φ</u> durumunda bu numaraya telefon edin lütfen.
10. あのスーパーはあしたは休み <u>の</u> はずです。	0 market yarın tatil <u>φ</u> olmalı.
11. 小川さんの話はほんとう <u>の</u> ようです。	Ogawa Bey' in / Hanım' ın söyledikleri gerçek <u>φ</u> gibi (görünüyor) .

類似する用法

日本語の原文

1. それは私の傘です。
2. 机の上に写真があります。
3. グプタさんの到着はいつですか。

トルコ語の逐語訳

- Şu benim şemsiyemdir.
 Sıranın üstünde fotoğraf var.
 Gıpta Bey'in / Hanım'ın varışı ne zaman?

二つ以上の表現形式が対応する用法

日本語の原文

1. テーブルは説明書の通りに、組み立ててください。
2. 食事のあとで、コーヒーを飲みます。

トルコ語の逐語訳

- Masayı açıklama klavuzu (-ndaki gibi/-nin doğrultusunda) monte edin (iz) lütfen.
 Yemek (-ten sonra /φsonrasında / φsonrası) kahve içerim.

第二部の60問の選択肢問題を作成する際には、教材に記載の「の」格の全用法と「の」格と混同しやすい他の全ての助詞の用法を使用した。また各用法にそれぞれ2問の設定問を作成した。

3. 分析結果

3. 1. アンケート第一部の分析結果

ここではまず、学習者の実際の日本語能力レベルを期待される成果と比較してみる。学習者の日本語能力レベルは、1週間に学習する日本語授業の時間数、授業の内容及び使用教材からみて一般的には予備課程終了の時点で旧日本語能力試験の3級レベル、2年生終了の時点で旧日本語能力試験の2級レベル、3年生と4年生は専門科目、教育実習、卒論が中心になっているため上級レベルに相当すると考えられる。このことからすると、2年生の12名のうち3級が1名 (8.33%) で、日本語の学習が効率的に進んでいないように思われる。次に、3年生6名のうち、1名 (16.6%) のみが3級に合格している。このことから、3年生の日本語能力レベルは期待されるレベルより低いと言える。割合で2年生と3年生を比較してみると、合格率は同じである。また、4年生20名のうち、10名 (50%) が3級、2名 (35%) が2級、3名 (5%) が1級に合格しており、合計で15名 (75%) が能力試験に合格している。このことから、4年生の方が比較的効率的に日本語を学習していると言える。また、卒業生の15名のうち6名 (40%) が3級、6名 (40%) が2級、1名 (6.66%) が1級に合格しており、合計で13名 (86.66%) が能力試験に合格している。最後に、留学生10名のうち、1名 (10%) が3級、2名 (20%) が2級、5名 (50%) が1級に合格しており、合計で8名 (80%) が日本語能力試験の資格を持っている。これらの結果から次のことが言える。

4年生、卒業生、留学生は期待されているとおりに、過半数の学生は日本語能力試験の関連する

レベルを有している。しかし、2年生と3年生は合格率が低く、日本語能力試験の合格者は1名のみである。この傾向の原因として、3年生は日本語の授業はなく、その代わりに日本語で教えられ、文学、社会、翻訳、教授法等の科目があることが考えられる。これらの授業では日本語の正しさではなく、流暢さが重視されるため、学習者はより正しい日本語を使用する努力をせず、授業の内容の方を重要視しているのではないかと考えられる。

3. 2. アンケート第二部の分析結果

3. 2. 1 第二部の選択肢問題の構成

本調査のアンケート問題では、次のものを使用した。

1. 『みんなの日本語 I・II』（スリーエーネットワーク、2000）で使用されている格助詞「の」で、トルコ語の形式と類似するものと相違するものを含む全ての用法。（2問ずつ）
2. 『みんなの日本語 I・II』（スリーエーネットワーク、2000）で使用されている格助詞「の」以外の全ての助詞で、格助詞「の」の用法と混同されると考えられる用法。（2問ずつ）

上記のように、全ての設問から2問ずつ作った。設問を2問ずつ作ったのは、不注意で誤答を出したのか、または実際にその用法の使用或いは使い分けを知らないために誤用しているのかということを見るためである。このように学習者のその設問に関する問題を把握した上で、同じ用法に関する2問とも誤答であった場合のみを実際の誤用として取り扱うことにする。

アンケートの第二部の問題として、初級教材の中の「の」格の全ての用法及び他の助詞と混同されると予測される用法を用いるのは次の通りのためである。

1. 日本語とトルコ語の相違する形式には、誤用が多いか否か。
2. 日本語とトルコ語の類似する形式でも誤用が多い用法があるか。あるのであれば、どの用法か。
3. その他の助詞の用法で格助詞「の」の用法と混同されると考えられる用法は、実際に誤用が多いか。それとも、これらは日本語の格助詞の使い分けよりも、トルコ語の語尾形式の日本語と相違することによる誤用であるのか。

まず、① 日本語の格助詞「の」の全ての用法、② 日本語の格助詞「の」以外の助詞の用法で「の」の用法と混同されると予測される用法の2グループに大きく分けた。この理由は、学習者の誤答は単に母語干渉によるものか、または日本語の助詞同士の混同によるものかを見るためである。更に、これらの2グループは以下に提示するように、3グループに分けられると予測した。この分類における下位分類は、学習者の誤用が発生すると予測されるトルコ語の語尾形式が対応する格助詞「の」或いは他の助詞の用法グループであり、その中で誤用が発生する可能性の高いものから

低いものへと順に並べたものである。

① 日本語の格助詞「の」の用法の全て

1. 日本語の「の」の用法とトルコ語の対応する形式が相違するもの
2. 日本語の「の」の用法とトルコ語の対応する形式において、類似するものと相違するものが存在するもの
3. 日本語の「の」の用法とトルコ語の対応する形式が類似するもの

② 日本語の格助詞「の」以外の助詞の用法で格助詞「の」の用法と混同されると予測されるもの

1. 日本語の助詞の用法とトルコ語の対応する形式が相違するもの（日本語の「の」に当たる属格語尾の(-n1n)であるもの）
2. 日本語の助詞の用法とそれに対応するトルコ語には類似する形式も、相違する形式もあるもの（日本語の「の」に対応するトルコ語の形式には類似する属格語尾の(-n1n)も相違する語尾形式も存在するもの）
3. 日本語の助詞で格助詞の「の」の用法と類似する特徴があるもの

下記の表1は、日本語の格助詞「の」が表す用法を問う上記の問題グループ①における設問の番号と格助詞「の」の用法を示す表である。この表により、①の問題グループにおける問題で格助詞「の」にトルコ語の対応する形式（従って問題の予測される難易度）及び、その問題で問われる格助詞「の」が表す用法が分かる。

表1 日本語の格助詞「の」の全ての用法

設問のグループ	設問の番号	「の」が表す用法
1) 日本語の「の」の用法とトルコ語の対応する形式の相違するもの (1. 日本語の「の」に対応するトルコ語が相違すること)	1 = 2 3	[主体-所属先]
	2 0 = 2 2	[関係の基点-時間関係の基点]
	4 4 = 4 7	[場所-存在の場所]
	1 4 = 1 7	[場所-出生・出産の場所]
	5 = 1 1、2 8 = 3 1	[内容・関与物]
	9 = 1 2	[N 2は形式名詞(ほう)]
	1 3 = 1 9	[N 2は形式名詞(場合)]
	2 5 = 3 0	[N 2は形式名詞(はず)]
	5 0 = 5 3	[N 2は形式名詞(予定)]
	3 5 = 4 1	[N 2は助動詞(よう)]

2) 日本語の「の」の用法とトルコ語の対応する形式には類似するものも相違するものも存在するもの (1. 日本語の「の」に対応するトルコ語が相違すること) (2. 日本語の「の」に対応するトルコ語には二つ以上の語尾形式があること)	4 5 = 5 9 5 5 = 5 7 4 = 8	[関係の基点-時間関係の基点] [N 2は形式名詞 (とおり)] [N 2は形式名詞 (ため)]
3) 日本語の「の」の用法とトルコ語の対応する形式が類似するもの (1. 共通又は近接な用法を持つ日本語の助詞の習得が困難であること)	7 = 1 0 4 9 = 5 2 3 9 = 4 2 3 3 = 3 6	[主体-所有主] [主体-動作主] [対象-動作・行為の対象] [関係の起点-空間関係の基点]

* 「=」の記号は「の」格の同じ用法を問う問題のペアを意味する

下記の表2は、日本語の格助詞「の」の用法と混同されると予測される用法を持つ他の助詞の用法を問う上記の問題グループ②における設問の番号と用法が問われる助詞を示す表である。この表により、問題グループ②における問題で用法が問われる助詞にトルコ語の対応する形式（従って問題の予測される難度）及び、その助詞の用法を問う問題番号が見られる。

表2 日本語の「の」以外の助詞の用法で「の」の用法と混同されると予測されるもの

設問のグループ	設問の番号	用法が問われる助詞
1) 日本語の助詞の用法とそれに対応するトルコ語の形式が相違するもの（日本語の「の」に対応するトルコ語の形式が属格語尾の(-n1n)であるもの) (1. 日本語の「の」に対応するトルコ語が相違すること)	2 = 3	(~は~が)
	6 = 1 5	(~は~が)
	1 6 = 1 8	(~が)
	2 9 = 3 2	(~に)
2) 日本語の助詞の用法とそれに対応するトルコ語には類似する形式も、相違する形式もあるもの（日本語の「の」に対応するトルコ語の形式には類似する属格語尾の(-n1n)も相違する語尾形式も存在するもの) (1. 日本語の「の」に対応するトルコ語が相違すること) (2. 日本語の「の」に対応するトルコ語には二つ以上の語尾形式があること)	2 1 = 2 6	(~に)
	2 4 = 2 7	(~に)
	3 7 = 4 3	(~で)
	4 8 = 5 1	(~で)
	4 6 = 5 6	(~で)
	4 0 = 5 4	(~と)

3) 日本語の助詞で格助詞の「の」の用法と類似する特徴があるもの (1. 共通又は近接な用法を持つ日本語の助詞の習得が困難であること)	5 8 = 6 0	(～を)
	3 4 = 3 8	(～へ)

* 「=」の記号は「の」格の同じ用法を問う問題のペアを意味する

3. 2. 2 第二部の選択肢問題の分析結果

本調査の第二部は60問の選択肢問題からなっている。学生の回答を元に次の60問の誤答数・誤答率表を作成した。各欄の左側の数字はその学年の学習者のうち、何名が誤答を出したかを表す。右側の括弧内の数字は、左側に示した学習者の数がその学年の学習者のうちどのぐらいかを百分率で表したものである。要するに誤答率をその学年の学習者の人数で計算している。問題の正答を、使用した教材における用法を元に決定し、正答以外の選択肢を学習者の母語であるトルコ語に逐語訳し作成した。

表3 調査対象者全員の選択肢問題の誤答数・誤答率

答数数 (誤答率)	チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学				日本の留学生 (10名)	合計 (63名)
	2年生 (12名)	3年生 (6名)	4年生 (20名)	卒業生 (15名)		
問題1	1 (8.3)	1 (16.6)	7 (35)	2 (13.3)	2 (20)	13 (20.63)
問題2	1 (8.3)	3 (50)	4 (20)	3 (20)	0 (0)	10 (17.46)
問題3	8 (66.6)	3 (50)	6 (30)	6 (40)	1 (10)	24 (38.09)
・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・
問題58	8 (66.6)	2 (33.3)	10 (50)	0 (0)	0 (0)	20 (31.74)
問題59	8 (66.6)	0 (0)	10 (50)	0 (0)	0 (0)	18 (28.57)
問題60	10 (83.3)	4 (66.6)	13 (65)	1 (6.6)	0 (0)	28 (44.44)
合計	451 (62.63)	187 (51.94)	697 (58.08)	228 (25.33)	116 (19.13)	1680 (44.44)

* ()の中は百分率を表す。

上記の誤答数・誤答率表のうち、学年別に学習者全員が正答を出した問題を表に示す。

表4 学年別に学習者全員が正答を出した問題

学年	2年生 (12名)	3年生 (6名)	4年生 (20名)	卒業生 (15名)	日本留学中の学生 (留学生) (10名)
問題番号	5	4, 12, 14, 59	無し	7, 9, 28, 36, 42, 58, (13, 19), (45, 59)	2, 4, 7, 8, 11, 20, 21, 33, 42, 47, 53, (9, 12), (13, 19), (14, 17), (28, 31), (45, 59), (49, 52), (55, 57), (58, 60)

上記の表4は、トルコ人日本語学習者の同じ学年の学習者全員が正答を出した問題を表すものである。括弧内の番号は「の」格の同じ用法を問うペアの問題を指す。これによると、まず全員正答を出した学年は留学生である。また、全員が正答を出した学年を正答問題数が多い方から並べる

と、留学生の次に卒業生が10問と2番目に多く、3年生は4問と3番目に多く、2年生は1問と4番目に多い学年である。全員が誤答を出した問題が1問もなかった学年は4年生である。

次に、上記の誤答数・誤答率表の数字を基に、全学年の学生が出した合計の正答数・正答率及び誤答数・誤答率を下記の表に示す。

表5 全学年の全正答数（全正答率）及び全誤答数（全誤答率）

学年	全正答数 (全正答率)	全誤答数 (全誤答率)	全回答数 (全回答率)
2年生(12名)	269 (37.36%)	451 (62.63%)	720 (100%)
3年生(6名)	173 (48.05%)	187 (51.94%)	360 (100%)
4年生(20名)	503 (41.91%)	697 (58.08%)	1200 (100%)
卒業生(15名)	672 (74.66%)	228 (25.33%)	900 (100%)
留学生(10名)	484 (80.66%)	116 (19.33%)	600 (100%)

表5は、学年ごとの誤答数（誤答率）及び正答数（正答率）を元に作成した表である。この表は、全学年の学生が出した合計の正答数（正答率）及び誤答数（誤答率）を表すものである。まず、全正答率を学年別でみると、全学年の中で留学生の正答率が80.66%で最も高かった。正答率が次に高かった学年を順番に並べると、卒業生は74.66%と2番目に高く、3年生は48.05%と3番目に高く、4年生は41.91%と4番目に高かった。正答率が最も低かった学年は37.36%の2年生であった。次に、全誤答率を学年別でみると、全学年の中で2年生の誤答率が62.63%と最も高かった。誤答率が次に高かった学年を順番に並べてみると、4年生は58.08%と2番目に高く、3年生は51.94%と3番目に高く、卒業生は25.33%と4番目に高かった。誤答率が最も低かった学年は19.33%の留学生であった。

このことは、学習者の日本語能力レベルと、誤用の現れの程度と絶対的な関係があることを示す。調査対象者10名のうち、日本語能力試験の1級レベルを5名、2級レベルを2名、1級レベルを1名が所有しているトルコ人の留学生は正答が最も多く、誤答の最も少ないグループであった。これに対して、調査対象者12名のうち日本語能力試験の3級レベルを1名のみ所有している2年生は正答が最も少なく、誤答の最も多いグループであった。

次頁の表6は、格助詞「の」の用法とそれに対応するトルコ語の語尾形式から予測し作成した上記の表1の問題に対して得られた調査対象者全員（63名）の回答をもとに作成した「の」格の用法別の誤答数・誤答率を表す表である。表内の右から2番目の列である「設問ごと」の欄にその設問で得られた誤答数とその数値の調査対象者全員の63名における百分率を示した。その右側の「平均」という欄に同じ用法に関する二つの問題で得られた誤答数の平均とその数値の調査対象者全員の63名における百分率を示した。

表6 アンケート対象者全員の格助詞「の」の用法からみた誤答数・誤答率（逐語訳付き）

格助詞「の」の用法		設問番号－設問	誤答数・誤答率 調査対象者全員（63名）	
			設問ごと	平均
第 1 グ ル ー プ	1 主体－ 1c. 所属先	1.A: あの人は誰ですか？(O kişi kimdir?) B: あの人はサバング・ホールディ ングス___イエシムさんですよ。(O kişi Sabancı Holding' <u>ten/teki</u> Yeşim Hanım(dır).)	13 (20. 63)	22 (34. 92)
		23. A:あの方はどなたですか。(O kişi kimdir?) B:セダーさんです。セダーさんはエーゲ 大学___先生です。(Seda Hanım- dır. Seda Hanım Ege Üniversitesi' (<u>-nde</u> öğretmen(dır)/ <u>φ/-nin</u> öğretmeni(dır).)	31 (49. 20)	
	3 関係の基点 －3c. 時間関係 の基点	20. きのう___夜テレビを見ましたか。 (Dün <u>φ</u> gece televizyon seyrettin(iz) mi?)	26 (41. 26)	28. 5 (45. 23)
		22. 金曜日___午後大学は休みです。 (Cuma <u>φ</u> öğleden sonrasında üniversite tatil(dır).)	31 (49. 20)	
	9 内容・関与物	5. これは英語___本です。 (Bu İngilizce <u>φ</u> kitabı(dır).)	7 (11. 11)	11. 5 (18. 25)
		11. 友人はダイエット___本を書いています。 (Arkadaşım diet <u>φ</u> kitabı yazıyor.)	16 (25. 39)	
		28. 日本語___勉強はどうですか。 (Japonca <u>φ</u> çalışması nasıl?)	21 (33. 33)	24. 5 (38. 88)
		31. 日本___食べ物は好きですか。 (Japon <u>φ</u> yiyeceklerini severmisin(iz)?)	28 (44. 44)	
	4 場所－ 4a. 存在の場所	44. オランダ___アムステルダムから来ました。 (Hollanda Amsterdam' <u>dan</u> geldim.)	39 (61. 90)	31. 5 (50)
		47. 大学___図書館に映画のDVD もおいてあ りますよ。(Üniversite <u>φ</u> kütüphanesi'nde film DVDsi var.)	24 (38. 09)	
4 場所－4b.	14. ムラット 124 はトルコ___自動車です。 (Murat 124 Türk <u>φ</u> arabası(dır) / Murat 124 Türkiye' <u>de</u> araba(dır).)	13 (24. 52)	17 (26. 98)	
出生・出産の場 所	17. まんじゅうは日本___お菓子です。 (Manjū Japon <u>φ</u> şekerlemesidir. / Manjū Japonya' <u>da</u> şekerlemedir.)	21 (33. 33)		
20a. N2は形 式名詞	9. A: スーパーとコンビニとどちらが便利です か。(Süpermarket ile bakkaldan hangisi daha kullanışlı(dır)?) B: コンビニ___ほう___便利です。 (Bakkal <u>φ</u> daha kullanışlı (dır).)	9 (19. 28)	11. 5 (18. 25)	
	12. A: 映画と演劇とどちらが好きですか。 (Sinema ile tiyatrodan hangisini daha çok seversin(iz)?) B: 演劇___ほう___好きです。 (Tiyatro <u>yu</u> daha çok severim.)	14 (22. 22)		

		13. 事故__場合は、この番号に電話してください。(Kaza <u>φ</u> durumunda, bu numaraya telefon edin(iz) lütfen.)	14(22. 22)	13 (20. 63)
		19. 地震__場合は、非常口から逃げます。(Deprem <u>φ</u> durumunda acil çıkış kapısından kaçılır.)	12(19. 04)	
		25. 国民の祝日ですから、明日図書館は休み__はずです。(Milli bayram olduğu için, yarın kütüphane kapalı <u>φ</u> olmalı.)	45(71. 42)	43 (68. 25)
		30. 旅行に行くと言っていましたから、隣の人は留守__はずです。(Seyahate çıkacağını söylediğinden, yan komşu evde yok <u>φ</u> olmalı.)	41(65. 07)	
		50. 旅行は1週間__予定です。(Gezi 1 haftalık /-liğına /olarak planlanmıştır.)	41(65. 07)	32. 5(51. 58)
		53. 明日は見学__予定です。(Yarın gezi <u>φ</u> planlanıyor.)	24(38. 09)	
2 0 b. N 2 は助動詞		35. ジェミレさんの話は本当__ようです。(Cemile Hanım'ın söyledikleri gerçek <u>φ</u> gibi görünüyor.)	34(53. 96)	32 (50. 79)
		41. (人が集まっているのを見て) けんか__ようですね。(İnsanların toplandığını görüp) Kavga <u>φ</u> gibi görünüyor.)	30(47. 61)	
第2グループ	3 関係の基点- 3 c. 時間関係の基点	45. 朝ご飯__あとで、コーヒーを飲みます。(Sabah kahvaltısı(<u>ndan</u> sonra / - <u>nin</u> sonrasında) kahve içerim.)	31(49. 20)	24. 5(38. 88)
		59. 散歩__あとで、テレビを見ます。(Yürüyüşten sonra / <u>φ</u> sonrasında / <u>φ</u> sonrası) televizyon izlerim.)	18(28. 57)	
	2 0 a. N2 は形式名詞	55. 地図__とおりに歩いてください。(Harita <u>daki</u> gibi / - <u>nin</u> doğrultusunda yürüyün(üz) lütfen.)	29(46. 03)	28. 5(45. 23)
		57. いすは説明書__とおりに、組み立ててください。(Sandalyeyi açıklama klavuzunu(<u>ndaki</u> gibi / - <u>nin</u> doğrultusunda) monte edin(iz) lütfen.)	28(44. 44)	
		4. 健康__ために、毎日運動します。(Sağlık <u>φ</u> için hergün spor yaparım.)	4(6. 34)	8 (12. 69)
		8. 彼は毎日私__ために、病院へお見舞いに来てくれます。(O hergün benim için, hastaneye ziyarete geliveriyor.)	12(19. 04)	
第3グループ	1 主体- 1a. 所有主	7. これは私__車です。(Bu benim arabam(dır).)	5(7. 93)	12 (19. 04)
		10. A: きれいなかばんですね。(Ne güzel çanta(ymış).) B: これは母__かばんですよ。(Bu annem <u>in</u> çantası ya.)	19(30. 15)	
	1 主体- 1 d. 動作主	49. ネシェさん__到着はいつですか。(Neşe Hanım'ın varışı ne zaman?)	37(58. 73)	35 (55. 55)
		52. お客さん__来場は何時ですか。(Misafirlerin <u>in</u> teşrifi saat kaçta?)	33(53. 96)	

2 対象一 2a. 動作・ 行為の対象	39. この漢字____読み方は何ですか。 (Bu Kanji'nin okunuşu nedir?)	29 (46. 03)	30. 5 (48. 41)
	42. この料理____作り方を教えてください。 (Bu yemeğin yapılışını öğretin lütfen.)	32 (50. 79)	
3 関係の起点 -3d. 空間関係 の基点	33. 冷蔵庫____中に何もありません。 (Buzdolabın içinde hiçbir şey yok.)	23 (36. 50)	23. 5 (37. 30)
	36. 電話ボックスは郵便局____前にあります。 (Telefon kulübesi postanenin önünde(dir).)	24 (38. 09)	

* () の中は百分率を表す。

下記の表7は、格助詞「の」の用法と混同されると予測される用法を持つ他の助詞の用法に対応するトルコ語の語尾形式から予測し作成した上記の表2の問題に対して得られた調査対象者全員(63名)の回答をもとに作成した「の」格の用法別の誤答数・誤答率を表す表である。表内の右から2番目の列である「設問ごと」の欄にその設問で得られた誤答数とその数値の調査対象者全員の63名の中における百分率を示した。その右側の「平均」という欄に同じ用法に関する二つの問題で得られた誤答数の平均とその数値の調査対象者全員の63名の中における百分率を示した。

表7 アンケート対象者全員の格助詞「の」以外の助詞の用法で「の」の用法と混同されると予測される問題の誤答数・誤答率(逐語訳付き)

(助詞)	設問番号-設問	誤答数・誤答率 調査対象者全員(63名)		
		設問ごと	平均	
第 1 グ ル ー プ	2. ゼリハさん____料理____上手です。(Zeliha Hanım'ın yemeği <u>φ</u> güzeldir./ Zeliha Hanım <u>φ</u> yemekte maharetlidir.)	10 (15. 87)	16 (25. 39)	
	3. 私____子ども____います。 (Benim çocuğum <u>φ</u> var.)	24 (38. 09)		
	6. 私____背____低いです。 (Benim boyum <u>φ</u> kısa(dır).)	31 (49. 27)	26. 5 (42. 06)	
	15. イスタンブール____人____多いです。 (İstanbul (' <u>un</u> insanı/ ' <u>da</u> insan) <u>φ</u> çok(tur).)	22 (34. 97)		
	(が)	16. オカンさん____書いた絵はどれですか。 (Okan Bey'in çizdiği resim hangisi(dir)?)	31 (49. 20)	38 (60. 31)
		18. 妻____病気____とき、会社を休みます。 (Karımın hastalık <u>φ</u> zamanında/Karım <u>φ</u> hasta <u>φ</u> iken, işten izin alırım.)	45 (71. 42)	
	(に)	29. ファトウマさん____赤ちゃんが生まれたのを知っていますか。(Fatma Hanım'ın çocuğunun doğduğunu biliyor musun(uz)?)	51 (80. 95)	40 (63. 49)
		32. 駅前____大きなデパートができたそうです。 (İstasyon önünde büyük bir alışveriş merkezi açılmış.)	29 (46. 03)	

第 2 グ ル ー プ	(に)	21. 私はオヤさん___花をあげました。 (Ben Oya Hanım (-'a çiçek/ - <u>nın</u> çiçeğini) verdim.)	26 (41. 26)	31. 5 (50)
		26. 私はカレンさん___お土産をもらいました。 (Ben Karen Hanım (' <u>dan</u> hediye / - <u>ın</u> hediyesini) aldım.)	37 (58. 73)	
		24. 一週間___一日間休みます。 (Hafta (- <u>nın</u> bir günü/ - <u>da</u> bir gün) dinlenirim.)	29 (46. 03)	30 (47. 61)
		27. 一日___一時間散歩します。 (Gün(- <u>de</u> bir saat/- <u>nün</u> bir saati) yürüyüş yaparım.)	31 (49. 20)	
	(で)	37. 世界___一番高い山はエベレストです。 (Dünya(- <u>nın</u> /- <u>daki</u>) en yüksek dağ Everest'tir.)	38 (60. 31)	39. 5 (62. 69)
		43. クラス___一番面白い人は誰ですか。 (Sınıf (- <u>ın</u> /- <u>ta</u> /- <u>taki</u>) en komik kişi kim(dir)?)	41 (65. 07)	
		48. 7月に京都___お祭りがあります。(Temmuz'da Kyoto (<u>φ</u> /' <u>nun</u> Festivali / ' <u>da</u> festival) var.)	33 (52. 38)	33. 5 (53. 17)
		51. 2020年にイスタンブール___オリンピックが開催されます。(2020 yılında (İstanbul <u>φ</u> Olimpiyatları/İstanbul' <u>da</u> olimpiyatlar) düzenlenecek.)	34 (56. 60)	
		46. 一日___朝が一番好きです。 (Bir <u>günde</u> /günün en çok sabahı/- <u>nı</u> severim.)	38 (60. 31)	40 (63. 49)
		56. 私は一年___夏が一番好きです。 (1 yıl <u>da</u> en çok yazı/1 Yıl <u>ın</u> en çok yazını severim.)	42 (66. 66)	
(と)	40. サッカーと野球___どちらが面白いですか。 (Futbol ile Beyzbol ' <u>dan</u> /'- <u>ın</u> hangisi daha eğlenceli?)	36 (57. 14)	42. 5 (67. 46)	
	54. ドルマとサルマ___どちらがおいしいですか。 (Dolma ile Sarma ' <u>dan</u> /'- <u>nın</u> hangisi daha lezzetli?)	49 (77. 77)		
第 3 グ ル ー プ	(を)	58. 5時に子ども___迎えに行きます。 (Saat 5te çocuk(lar) <u>ı</u> karşılamaya giderim.)	20 (31. 74)	24 (38. 09)
		60. 図書館へ本___借りに行きます。 (Kütüphaneye kitap <u>φ</u> ödünç almaya giderim.)	28 (44. 44)	
	(へ)	34. フランス___料理を習いに行きます。 (Fransa'(<u>ya</u> /- <u>da</u>) aşçılık öğrenmeye gidiyorum. / Fransız <u>φ</u> Mutfağı'nı öğrenmeye gidiyorum. / Fransız <u>φ</u> yemeği yapmayı öğrenmeye gidiyorum.)	45 (71. 42)	46 (73. 01)
		38. 日本___文化を研修に行きます。 (Japonya'(<u>ya</u> /- <u>da</u>) kültür talimine gidiyorum / Japon <u>φ</u> Kültürünü talime gidiyorum.)	47 (74. 60)	

* () の中は百分率を表す。

上記の2つの表は、本調査の対象者であるトルコ人日本語学習者全員の第二部の選択肢問題の分析結果を表すものである。表6はアンケート対象者全員の格助詞「の」の用法からみた誤答数・誤答率を表すもので、表7はアンケート対象者全員の格助詞「の」以外の助詞の用法で「の」格の用法と混同されると予測される問題の誤答数・誤答率を表すものである。「の」格と他の助詞の混同が予測される問題を本調査のアンケートに含めた理由は、本調査の前に数人の留学生を対象に行った予備調査の結果である。その数人の留学生が出した誤答はトルコ人日本語学習者の日本語レベルが高くなっても現れる誤用を表しており、学習者全員の共通の問題である可能性が高いと考えられるものだからである。

これらの2つの表を合わせて全体で見ると、誤答が最も多かった問題は「へ」の用法を問う34番と38番の問題である。

34. フランス_____料理を習いに行きます。

1) ϕ ②へ 3) の 4) で

(逐語訳 : Fransa' (ya /-da) aşçılık öğrenmeye gidiyorum. /

Fransız ϕ Mutfağı'nı öğrenmeye gidiyorum. /

Fransız ϕ yemeği yapmayı öğrenmeye gidiyorum.)

38. 日本_____文化を研修に行きます。

1) で 2) の 3) ϕ ④へ

(逐語訳 : Japonya' (ya /-da) kültür talimine /

Japon ϕ Kültürünü talime gidiyorum.)

これらの問題は格助詞「の」と他の助詞との混同が予測される問題の第3グループに属すると予測した問題である。これら2問に対して合計で63名のうち46名が誤答を出した。これらの問題は日本語の「の」格の他の助詞との混同が原因で起こる問題であると予測される問題である。しかし、これらの問題で多くの誤答が得られたことの原因は単に「の」格の他の助詞との混同によるものではない。この問題では日本語の「の」に対応するトルコ語には二つ以上の語尾形式があることにより、トルコ語の語尾形式の種類の豊富さも学習者の選択に影響を与えたと考えられる。それに加えて、共通又は近接な用法を持つ日本語の助詞の習得が困難であることによる学習者の不十分な理解も多くの誤答が得られた原因の一つであると考えられる。

次に、全体で誤答が2番に多かったのは格助詞「の」の「形式名詞 (cf. 20a N2)」の用法を問う25番と30番の問題であり、63名のうち43名が誤答を出した。日本語のモダリティー形式の形式名詞である「～はずだ」は「動詞」、「名詞」、「ナ形容詞」につくとき、それぞれ違う語尾形式が挿入されるが、トルコ語ではそのような区別がなく、常にゼロ形式の(ϕ)になるため、トルコ人日本語学習者にとって習得が最も難しい項目の一つであると言える。本調査を行う前に、同じ問題を用いて1人の留学生のトルコ人日本語学習者を対象にミニアンケートを行った。そのミニアンケートで、その一人の留学生のトルコ人日本語学習者が出した誤答の一つがこの問題であったため、本調査にもそのまま含めた。本調査の問題でも、予測通り、その問題に対して得られた誤答数が最も多かった。それに、留学生のトルコ人日本語学習者の「の」格の用法に関する誤答より、「の」格以外の助詞の用法で「の」格と混同されると予測される用法に関する問題に出した誤答の方が多かったため、本調査のアンケートにそれらの助詞の「の」格の用法と共通又は近接の用法を

持つ助詞と混同されると予測した問題も含めた。予測通りに、「の」以外の助詞と「の」の混同が原因で出された誤答が全体で最も多い結果となった。

「～はずだ」の次に誤答が最も多く出された問題を見ると、それらは「で」の用法に関する3問と「に」の用法に関する問題である。これらの問題で問われる「で」の用法は[場所]であり、トルコ語では日本語のように[場所]の用法を表すのに3種類の異なった語尾形式は存在しないため、学習者は日本語の[場所]の用法を表す格助詞の使い分けに困難を感じていると思われる。これらの問題の予測される原因としてはその他に「トルコ語と日本語の形式の相違」、「トルコ語の語尾の使い分け」、「日本語の形式が表す用法とトルコ語の用法の類似による相互作用」の要因も絡んでいるため、より複雑な問題になっている。

3. 2. 3 誤用の原因

予測した誤用の原因について上記の3. 2. 1節の「第二部の選択肢問題の構成」で詳しく述べた。本研究で作成した学習者の誤用を誘発すると予測される用法の中で可能性の高いものから低いものへと順に並べて作成した分類に基づいて、詳細な分析によって予測した原因の他にもいくつかの原因が明らかになった。以下では、グループごとにそれらの原因を述べる。その際、まず予測した原因を書き、次に予測された以外に明らかになった原因を書くことにする。

1. 日本語の格助詞「の」の全ての用法

1) 日本語の格助詞「の」の用法とトルコ語の対応する形式が相違するもの

予測した原因 : ①日本語の「の」に対応するトルコ語が相違すること

その他に明らかになった原因 : ②共通又は近接な用法を持つ日本語の助詞の習得が困難であること

③日本語の「の」に対応するトルコ語には二つ以上の語尾形式があること

④学習者の「の」格そのものの用法の習得不足

⑤学習者の日本語の言語運用能力の不十分さ

2) 日本語の「の」の用法とトルコ語の対応する形式が類似するものも相違するものも存在するもの

予測した原因 : ①日本語の「の」に対応するトルコ語が相違すること

②日本語の「の」に対応するトルコ語には二つ以上の語尾形式があること

その他に明らかになった原因 : ③共通又は近接な用法を持つ日本語の助詞の習得が困難であること

④学習者の「の」格そのものの用法の習得不足

3) 日本語の格助詞「の」の用法とトルコ語の対応する形式の類似するもの

予測した原因 : ①共通又は近接な用法を持つ日本語の助詞の習得が困難であること

その他に明らかになった原因 : ②学習者の「の」格そのものの用法の習得不足

2. 日本語の「の」以外の助詞の用法で「の」の用法と混同されると予測されるもの

1) 日本語の助詞で格助詞「の」の用法と類似する特徴があるもの

予測した原因 : ①日本語の「の」に対応するトルコ語が相違すること

その他に明らかになった原因 : ②共通又は近接な用法を持つ日本語の助詞の習得が困難であること

③日本語の「の」に対応するトルコ語には二つ以上の語尾形式があること

④学習者の「の」格そのものの用法の習得不足

⑤学習者の日本語の言語運用能力の不十分さ

2) 日本語の助詞の用法とトルコ語の対応する形式が類似するもの（日本語の「の」に当たる属格語尾の(-n1n)であるもの）

予測した原因 : ①日本語の「の」に対応するトルコ語が相違すること

②日本語の「の」に対応するトルコ語には二つ以上の語尾形式があること

その他に明らかになった原因 : ③共通又は近接な用法を持つ日本語の助詞の習得が困難であること

④学習者の母語と日本語の類似による類推の誤り

3) 日本語の助詞の用法とトルコ語の対応する形式には類似する形式である属格語尾の(-n1n)も相違する形式も存在するもの）

予測した原因 : ①共通又は近接な用法を持つ日本語の助詞の習得が困難であること

その他に明らかになった原因 : ②日本語の「の」に対応するトルコ語には二つ以上の語尾形式があること

③学習者の日本語の「の」格そのものの用法の習得不足

おわりに

本稿ではDalkıran (2013) で論じた日土両言語の属格形式の類似する用法と相違する用法の一部であると考えられる初級教材における「の」格の用法を元に作成したアンケート調査によって、

トルコ人日本語学習者がそれらの用法を使用する際に犯す誤用を分析した。その際、Dalkıran (2013) で作成した「の」格の用法カテゴリ及び日土対訳用例データベースから明らかになった両言語の属格形式の相違点と学習者の誤答との間に一定の関係があるか否かを探り出し、その実状を明らかにするという目的に関して、第2章2.1節の調査目的でも述べたように以下の点を探った。

- ① 正答数及び誤答数から、誤答の多い用法と少ない用法はどれか。
- ② 両言語間の相違点と「の」格の誤答パターンに関連性はあるか。
- ③ 「の」格以外の助詞の用法の中で、「の」格の用法と混同しやすいと予測される用法の誤答は多いか、少ないか。
- ④ 両言語間の相違点以外に考えられる誤用の要因は何か。
- ⑤ 学習者の日本語レベルは、誤用の現れの程度と関係があるか。

その結果、以下の点が明らかになった。

- ① 日本語の「～はずだ」というモダリティ形式の形式名詞は、「の」格の用法の中で誤答が最も多い用法である。また、「N1」の名詞や人称代名詞を形式名詞の「ために」と結び付ける「の」格の[形式名詞 (cf. 20a, N2)]の用法に出された誤答は最も少なかった。
- ② 両言語の相違点と「の」格の誤答パターンに関連性が見られた。日本語の「の」に対応するトルコ語の形式が類似する問題で生じた誤答は、類推の誤りにより生じた誤答より多く、予測した通り両言語間の属格形式の相違が第1と第2の問題グループで誤答の原因として表れた。また、日本語の共通または近接の用法を持つ助詞の習得は確実に困難である。しかし、対応するトルコ語の形式が日本語と異なる一つの形式である場合に誤答がさらに増え、トルコ語でも対応する形式が2つ以上ある場合に困難度は更に上がり、誤答がさらに増え、問題はより複雑になる。

今回のアンケート調査の問題を作成する際に使用した初級教材の「みんなの日本語Ⅰ」及び「みんなの日本語Ⅱ」における「の」格の全16の用法のうち、11の用法は相違しており、3つの用法は類似している。要するに、両言語が同じような形式で属格形式を使用するのは初級レベルで導入される「の」の用法の5分の1に留まっており、5分の2の用法に関しては異なった形式が使用されている。このことは、更に多くの誤用を誘発する原因となっていると考えられる。

- ③ 「の」格以外の助詞の用法の中で、「の」格の用法と混同しやすいと予測される用法の誤答は平均で35.02 (55.58%) と「の」格の用法22.55 (35.79%) より多かった。
- ④ 両言語間の相違点以外の理由によると考えられる誤用の要因には予測された以外に次のような様々なものがみられた。

1) 言語干渉

- a) 学習者の母語と日本語の違いに基づくもの
⇒ (日本語の「の」に対応するトルコ語が相違すること)
 - b) 日本語そのものの体系や用法に基づくもの
⇒ (共通又は近接な用法を持つ日本語の助詞の習得が困難であること)
 - c) トルコ語そのものの体系や用法に基づくもの
⇒ (日本語の「の」に対応するトルコ語には二つ以上の語尾形式があること)
 - d) 学習者の母語と日本語の類似に基づくもの
⇒ (類推の誤り)
- ⑤ 学習者の日本語レベルは、誤用の現れの程度と絶対的な関係がある。調査対象者12名の2年生のうち日本語能力試験を受けたものは1名(3級レベル合格者)のみである。2年生は受験率が62.63%と最も高い学年であった。調査対象者10名のうち5名が日本語能力試験の1級レベルを、2名が2級レベルを、1名が1級レベルを所有しているトルコ人の留学生は、誤答の一番少ないグループであった。これに対して12名のうち1名のみが日本語能力試験の1級レベルを所有している2年生は誤答が最も多いグループであった。

〈参考文献〉

- Baykara, Oguz (2002) 「トルコ語と日本語における音素の対照分析及び日本語話者のトルコ語に見られる発音の誤り」『言語と交流』(5), pp: 74-87, 言語と交流研究会、
- Corder, S.P (1967) “The Significance of Learner’s Errors” *IRAL International Review of Applied Linguistics in Language Teaching*, Vol 5 (4), pp: 161-170
- Dalkıran, Ayşe Nur (2013) 「日土対訳データベースに見られる日本語とトルコ語の属格形式」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』36, pp: 189-210, 岡山大学大学院社会文化科学研究科
- 稲葉みどり(2004) 「日本語初級・中級レベルに見られる文法的誤り」『教養と教育: 共通科目研究交流誌』4, pp: 45-56, 愛知教育大学
- 栗山昌子(2004) 「日本語指導に向けての誤用分析: 助詞を中心に」『比較文化: 福岡女学院大学大学院人文科学研究科紀要』創刊号, pp: 37-62, 福岡女学院大学
- 小池生夫編集主幹(2003) 『応用言語学事典』東京: 研究社
- 小林幸江(1981) 「モンゴル人に対する日本語教育の研究: モンゴル人学生の誤用例を中心に」『日本語学校論集』8, pp: 25-38, 東京外国語大学
- 小林幸江(1983) 「モンゴル人学習者の作文にあらわれた誤用例の分析: 格助詞に関する誤用について」『日本語学校論集』10, pp: 44-53, 東京外国語大学

- 佐藤正子 (1984) 「アメリカ人の日本語誤用例の問題点-初級段階の場合-」 『講座 日本語教育』 19, pp: 1-22. 早稲田大学語学教育研究所
- 田窪行則 (1987) 「誤用分析 (1) - (6)」 『日本語学』 (6) 4-10, 明治書院
- ダルクラン・アイシェ・ヌル (2011) 「日本語の格助詞の使い分け及びトルコ人日本語学習者におけるその誤用の考察-「で」と「に」に関する日本語とトルコ語の対照研究-」 東京学芸大学大学院教育学研究科平成22年度修士学位論文
- 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析-中国語話者の母語干渉20例』 スリーエーネットワーク
- 原沢伊都夫 (2012) 「日本語初中級学習者の作文指導 : 学習者の誤用分析をもとに」 『静岡大学国際交流センター紀要』 6, pp: 79-92. 静岡大学
- 細川英雄 (1993) 「留学生日本語作文における格関係表示の誤用について」 『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』 5, pp: 70-89. 早稲田大学
- 松田真希子 (2006a) 「対訳付き日本語作文データベースに基づくベトナム語母語話者の誤用分析」 『日本語教育方法研究会誌』 13 (1), pp: 18-19. 日本語教育方法研究会
- 松田真希子 (2006b) 「日本語学習者の名詞句の誤用と言語転移--アジア7カ国による日本語作文データに基づく分析」 『留学生教育』 11, pp: 45-53. 留学生教育学会
- 松田真希子 (2005) 「対訳付き日本語作文データベースに基づくモンゴル語母語話者の誤用分析」 『日本語教育方法研究会誌』 12 (2), pp: 26-27. 日本語教育方法研究会
- 松田真希子 (2007) 「学習が非母語話者の日本語能力に与える影響: ベトナム語母語話者の名詞句の容認度を例に」 『日本語教育方法研究会誌』 14 (1), pp: 26-27. 日本語教育方法研究会
- 日本語教育学会編 (2005) 『日本語教育事典・新版』 東京: 大修館書店
- 安田春子 (2005) 「トルコ語を母語とする日本語学習者の受動文使用にみる誤用例について」 『語文と教育』 19, pp: 128-120. 鳴門教育大学